



英作文における日本人学習者のヘッジ・ブースター 使用 : ICNALEを活用した地域差・トピック差の比較

飯島, 真之

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 484:160-175

(Issue Date)

2026-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100502570>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100502570>



英作文における日本人学習者のヘッジ・ブースター使用

—ICNALE を活用した地域差・トピック差の比較—

飯島 真之(神戸市立工業高等専門学校)

m-ijima@kobe-kosen.ac.jp

Hedges and Boosters Used by Japanese Learners in English Essays

—Based on Regional and Topic Differences in ICNALE—

IIJIMA, Masayuki (Kobe City College of Technology)

概要

本研究では、主張の強弱調整の際に重要な役割を果たす、英語のヘッジ・ブースター表現(例: believe, certainly, may, must, probably, think 等)に焦点を当て、英語を母語としない日本人学習者がそれらをどのように使用しているのかを、アジア圏国際英語学習者コーパス ICNALE の英作文モジュールを活用して考察する。ICNALE を構成する 2 トピック(「大学生によるアルバイトの是非」、「レストランにおける全面禁煙の是非」)の作文における対象表現の頻度調査に基づき、(1)日本人学習者と英語母語話者の全体比較、(2)アジアの EFL 圏 6 地域(日本、中国、台湾、韓国、インドネシア、タイ)の学習者や職業属性別英語母語話者(大学生・英語教師・その他)における比較を行った結果、(1')日本人学習者は、母語話者以上に強意的な主張を行うが、「大学生によるアルバイトの是非」のトピックにおいて、より強意的、あるいは主観的な表現を使用する可能性があること、(2')アジアの EFL 圏学習者は英語母語話者以上により限定的な視点における強意的な主張を行い、特に日本人学習者は、より読み手を意識した強意性の高い主張を行う傾向があること等が示唆された。

キーワード

ヘッジ、ブースター、日本人学習者、英語母語話者、EFL

1. はじめに

意見英作文において、書き手は与えられたトピックに対して自身の主張を的確に提示する必要があり、特に個々の主張における強弱の程度調整は欠かせない。現代英語には、さまざまな品詞にわたり主張の強弱調整に関与する表現が存在しており、Hyland (2019) 等において、それらはヘッジ(hedges) (例: possible, probably, may) やブースター(boosters) (例: certain, definitely, must) といった枠組みの中で言及されてきた。英語教育の立場に立つと、外国語として英語を習得しようとする日本人学習者にとって、これらの表現の適切な使用は必ずしも容易ではなく、ブースターをヘッジ以上に多用する(Macintyre, 2013) といった傾向がこれまでも示されてきた。しかし

ながら、日本人学習者によるヘッジやブースターの使用実態を考察する際、英語を外国語として習得する他の地域の学習者による使用実態や、英作文そのもののトピック差の両方を踏まえた考察も必要となるだろう。Granger (2015) の改訂版中間言語対照分析モデル (CIA2) では、中間言語の多用性 (Interlanguage varieties) に配慮したモデルが提示されたが、日本人学習者のヘッジ・ブースター使用を地域差やトピック差の観点も踏まえて考察することには一定の意義があるといえるだろう。また、CIA2 では参照言語 (例: 英語母語話者) の多用性 (Reference language varieties) にも配慮されているが、母語話者データについても、単一のデータセットとしてみなすのではなく、一定の基準で複数のデータに区分することも必要となるだろう。

そこで本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパス ICNALE の英作文モジュールに含まれる、2 種のトピックの英作文データを活用し、コーパス言語学の研究手法を踏まえ、日本人学習者によるヘッジ・ブースター使用を、職業属性別母語話者やアジアの EFL 圏 6 地域 (日本、中国、台湾、韓国、インドネシア、タイ) の学習者との比較を通じて考察する。

2. 先行研究

これまで、L2 におけるヘッジ・ブースター使用に関し、どのような知見が示されてきたのだろうか。本節では、Macintyre (2013)、Wang and Jiang (2018)、Ningrum, Puspita, and Mulyadi (2024) における先行研究の知見を整理する。各々の先行研究が対象としたデータ、および得られた知見を下表に整理した。

表 1
先行研究事例とそれらの知見

先行研究	データ	知見
Macintyre (2013)	日本人大学生による計 3 トピックの英作文。	<ul style="list-style-type: none"> ・ブースターをヘッジ以上に多用する傾向。(例: should) ・使用頻度や使用表現に個人差。
Wang & Jiang (2018)	博士課程の学生と専門家による論文データ。基礎分野 (pure) と応用分野 (applied) における計 4 分野を対象。	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の方がスタンス標識を多用。(ヘッジ・ブースター・自己言及) ・分野比較では、pure>applied ・学生と専門家共に、結果と考察の項目で最もヘッジやブースターを使用。
Ningrum, Puspita, & Mulyadi (2024)	日本人学習者を含むアジア圏国際英語学習者コーパス ICNALE の英作文データ。	学習者は、ブースターをヘッジ以上に多用する傾向。(例: completely, really, always)

上表のような知見が、これまでの先行研究において示されてきた。これらは、学術論文や意見英

作文といった、L2 英語におけるヘッジ・ブラスター使用に関して多くの示唆に富む。Ningrum, Puspita, and Mulyadi (2024) や Macintyre (2013) については、研究対象に日本人学習者が含まれており、本研究と大きく関連するものといえるだろう。特に Ningrum, Puspita, and Mulyadi (2024) では、アジア圏国際英語学習者コーパス ICNALE を用いた国際比較が実施されており、本研究と類似したアプローチがとられている。しかしながら、上記の先行研究には、(1) 複数の母語話者データとの比較、(2) 対象表現における品詞の種類の変換、(3) 地域差・トピック差の総合的な考察といった点において更なる調査の余地があり、本研究ではそれらの点にも配慮し、頻度調査を踏まえた考察を行う。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

本研究では、日本人学習者が英作文中で使用する、ヘッジ・ブラスター使用の特徴を、EFL 圏 6 地域(日本、中国、台湾、韓国、インドネシア、タイ)の学習者、および 3 種類の職業属性別母語話者(大学生、英語教師、その他)との比較を通じて考察することを目的とする。また、作文のトピックによって、使用されるヘッジやブラスターがどのように異なるかについてもあわせて考察する。研究設問(RQ)は以下のとおりである。

- RQ1. 日本人と母語話者の間には、使用するヘッジ・ブラスターにどのような違いがあるか。また、作文のトピック差はみられるか。
- RQ2. EFL 圏 6 地域の学習者と 3 種の職業属性別母語話者は、個々の対象表現の頻度によってどのように分類可能か。また、作文のトピック差はみられるか。
- RQ3. EFL 圏 6 地域の学習者、3 職業属性別母語話者、および個々の対象表現にはどのような相互関係性があるか。また、作文のトピック差はみられるか。

3.2 データ

本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパス ICNALE の英作文モジュールである Written Essays(2.6) (以下 WE)を使用する。WE には、日本を含むアジア圏 10 地域の学習者による 2 トピックの英作文(「大学生によるアルバイトの是非」(以下 PTJ)、「レストランにおける全面禁煙の是非」(以下 SMK))のデータが収集されている。WE では、各参加者がこれら 2 トピックの作文を、一定の語数(1トピックあたり 200 語から 300 語)や時間(1トピックあたり 20 分から 40 分)の中で、辞書等を使用することなく執筆しており、さらに各参加者は 4 段階の習熟度(CEFR に基づく A2、B1_1、B1_2、B2)に区分されている(Ishikawa, 2023)。また、学習者データに加えて、3 種の職業属性(大学生、英語教師、その他)の母語話者(ENS)のデータについても収集されている。なお、本研究では、WE に含まれる 10 地域の作文データのうち、EFL 圏に属する日本(JPN)、中国(CHN)、台湾(TWN)、韓国(KOR)、インドネシア(IDN)、タイ(THA)における 2 トピックそれぞれの英作文データを使用する。WE の対象地域の参加者数は以下のとおりである。本研究では、

RQ1のみ日本人学習者と英語母語話者の全体傾向を把握するため、すべての作文データを使用するが、RQ2・3では、地域間比較の観点を含むため、各地域の学習者の習熟度をすべて B1_1に限定する。

表 2

WEにおける学習者（6地域）、ENS（3職業属性）の参加者数（JPN以外はB1_1のみ）

地域	参加者数			
日本 (JPN)	A2: 154	B1_1: 179	B1_2: 49	B2: 18
中国 (CHN)	B1_1: 232			
台湾 (TWN)	B1_1: 87			
韓国 (KOR)	B1_1: 61			
インドネシア (IDN)	B1_1: 82			
タイ (THA)	B1_1: 179			
母語話者 (ENS)	大学生 (Student) : 100	英語教師 (Teacher) : 44	その他 (Others) : 56	

WEにおけるEFL圏各地域とENSの参加者数は上表のとおりである。各参加者はPTJとSMKの2トピックの作文を行っているため、作文数については、参加者数の値を2倍した値である。

3.3 手法

3.3.1 本研究の対象表現

本研究では、Hyland (2019) が提示するヘッジとブースターの表現リスト (p.269 および pp. 271–272) を踏まえ、対象表現の選定を行っている。なお、同著者による先行研究である飯島 (in press) では、33種のレジスター別英語資料を収集したCOREの分析にあたり、対象表現をすでに選定している。本研究では、飯島 (in press) と対象表現をそろえたうえで調査と考察を実施する。下表は、本研究における対象表現を示したものである。下表では、Hyland (2019) のリストに基づき、ヘッジ (下表の分類 H) とブースター (下表の分類 B) を区分して提示している。

表 3

本研究の対象表現（飯島（in press）における表 3 を再編集）

品詞	分類	対象表現
形容詞 副詞	H	about_adv, almost, apparent, apparently, approximately, around_adv, broadly, doubtful, essentially, fairly, frequently, from my perspective, from our perspective, from this perspective, generally, in general, in most cases, in most instances, in my opinion, in my view, in our opinion, in our view, in this view, largely, likely_adj, likely_adv, mainly, maybe, mostly, often, on the whole, perhaps, plausible, plausibly, possible, possibly, presumably, presumably, probable, probably, quite, relatively, roughly, sometimes, somewhat, to my knowledge, typical, typically, uncertain, uncertainly, unclear, unclearly, unlikely_adj, unlikely_adv, usually
	B	actually, always, beyond doubt, certain, certainly, clear, clearly, conclusively, decidedly, definite, definitely, doubtless_adv, doubtless_adj, evident, evidently, in fact, incontestable, incontestably, incontrovertible, incontrovertibly, indeed, indisputable, indisputably, never, obvious, obviously, of course, really, sure_adj, sure_adv, surely, true, truly, undeniable, undeniably, undisputedly, undoubtedly, without doubt
法助動詞	H	could, may, might, ought, should, would
	B	must
語彙動詞	H	appear, appeared, appears, argue, argued, argues, assume, assumed, claim, claimed, claims, doubt, estimate, estimated, feel, feels, felt, guess, indicate, indicated, indicates, postulate, postulated, postulates, seems, suggest, suggested, suggests, suppose, supposed, supposes, suspect, suspects, tend to, tended to, tends to
	B	believe, believed, believes, demonstrate, demonstrated, demonstrates, establish, established, find, finds, know, known, prove, proved, proves, realize, realized, realizes, show, showed, shown, shows, think, thinks, thought

上記のヘッジ (H) とブースター (B) の区分は Hyland (2019) のリストにおける分類であるが、リストを概観すると、ヘッジの中にも一定の強意性を有する表現が存在しており、2 区分の差は曖昧である。そこで、本研究では 2 区分それぞれの表現を統合したうえで、結果を提示する。

3.3.2 WE の作文データに含まれる対象表現の頻度調査

本研究が扱う対象表現の中には、1 語の表現と 2 語以上からなる複合語表現の両方が含まれている。前者については English/Japanese Word Frequency Table Generator (EJWFTG) (v. 2.0) を、後者については、AntConc (v. 4.3.1) を使用し、頻度調査を実施する。

はじめに、EJWFTG (v. 2.0) を用いて、1 語の表現の頻度調査を実施する。EJWFTG はテキストデータ別に個々の単語頻度を取り出すことが可能な統合語彙頻度表作成ツールである (石川, 2024)。本研究では EJWFTG を使用することで、個々の作文別に対象語の頻度情報を取り出し、

(1)JPN 全体(4つの習熟度をすべて含む)と ENS 全体(3職業属性をすべて含む)、(2)B1_1レベルにおける6地域の学習者、および(3)3種の職業属性別 ENS における1作文(トピック別)当たりの対象表現の平均頻度を算出する。WEは1作文の総語数が200語から300語内に統制されているため、本研究では粗頻度に基づく頻度調査を実施する。なお、EJWFTGでは、「wordform」「wordform+POS」「lemma」「lemma+POS」の4種類の統合頻度表が同時に作成されるが、本研究では、単語を活用形別に取り出し、さらに spaCy による品詞タグ付けの処理が実施された「wordform+POS」のデータを使用する。これにより、各表現の頻度に、複数の品詞の頻度が混在することを極力避ける。なお、本研究では、形容詞、副詞、語彙動詞については、それぞれ ADJ、ADV、VERB のタグが付された表現を取り出す。なお、「wordform+POS」の機能上、アポストロフィー「'」を含む語は、その前後で2単語に区切られ、各々の表現の頻度が取り出される。そのため、法助動詞に関して、短縮形は *couldn*、*mustn*、*shouldn*、*wouldn* のように取り出され、*could*、*should*、*would* とは別単語として表示される。そこで法助動詞については、作文別に対象表現の原形・短縮形の頻度を合計したうえで、1作文あたりの平均頻度を再計算した。頻度を合計する過程で、原形の助動詞については助動詞タグ(AUX)の付された語の頻度を取り出し、短縮形(*couldn*、*mustn*、*shouldn*、*wouldn*)については、EJWFTGの機能上、助動詞タグ以外の品詞タグが与えられており、これらについては品詞タグの種類に関係なく頻度を合計した。

次に、AntConc(v. 4.3.1)を用いて、2語以上の対象表現(例: *of course*、*in fact*)の頻度調査を実施する。入力したデータセットに含まれる個々の対象表現の頻度を取り出し、その値をテキストファイル数(作文数)で割ることで、同様に(1)JPN全体と ENS 全体、(2)B1_1レベルにおける6地域の学習者、および(3)3種の職業属性別母語話者における1作文(トピック別)当たりの対象表現の平均頻度を算出する。

3.3.3 各研究設問(RQ)における手法

はじめに、RQ1では、PTJとSMKの2トピック別に、JPN全体(4習熟度すべてを含む)と ENS 全体(3職業属性すべてを含む)を比較し、JPNと ENS におけるヘッジ・ブラスター使用の全体傾向を把握する。前節において算出した、対象表現のトピック別1作文当たりの平均頻度に基づき、JPNと ENS それぞれにおいて高頻度表現を降順に整理する。

次に、RQ2では、トピック別に、B1_1に限定した6地域別学習者、および3職業属性別 ENS における対象表現の1作文当たりの平均頻度を調査する。その後、6地域別学習者(2トピック別のため計12群)、3職業属性別 ENS (2トピック別のため計6群)の計18群を変数、個々の対象表現をケースとした平均頻度表を作成する。その後、多変量解析手法の1つである階層的クラスター分析を実施し、変数である計18群の分類を行う。なお、距離の計算はローデータによる距離に基づいており、分析の手法はワード法による。

最後に、RQ3では、RQ2で作成した平均頻度表に対して多変量解析手法である対応分析を実施する。対応分析によって、作成した平均頻度表の個々のデータを2次元(計4象限)による散布図に整理して考察することが可能になる。

以上が、本研究の RQ 別の手法である。なお、RQ2 および RQ3 において実施する多変量解析では、関西学院大学の清水裕士が開発した統計分析プログラムである HAD18 を使用する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 日本人学習者と英語母語話者が使用するトピック別高頻度表現の全体傾向

はじめに、2 トピック(PTJ と SMK)別に、日本人学習者(JPN)と英語母語話者(ENS)それぞれにおける高頻度表現の全体傾向を把握する必要がある。手法で言及した方法で、対象表現の 1 作文あたりの平均頻度を算出し、その値の降順に、個々の表現を整理した結果、下表のようになった。下表では各群における平均頻度上位 15 位までの表現を記載している。なお、平均頻度の値が同一の表現も存在するため、必ずしも 15 表現になるとは限らない。

表 4

JPN と ENS におけるトピック別高頻度表現（上位 15 位まで）

JPN				ENS			
PTJ	平均 頻度	SMK	平均 頻度	PTJ	平均 頻度	SMK	平均 頻度
think	2.605	should	2.173	think	1.070	should	1.695
should	1.198	think	1.918	would	0.980	would	1.460
know	0.630	may	0.543	should	0.825	think	1.125
must	0.525	feel	0.510	may	0.540	feel	0.385
may	0.388	must	0.338	find	0.425	really	0.375
of course	0.235	of course	0.223	really	0.375	know	0.375
could	0.230	would	0.223	believe	0.350	may	0.355
would	0.178	often	0.198	feel	0.290	believe	0.265
really	0.140	know	0.193	could	0.285	could	0.180
feel	0.140	really	0.115	know	0.285	find	0.155
find	0.128	in fact	0.113	might	0.230	sure_adj	0.125
never	0.113	could	0.113	always	0.190	always	0.115
realize	0.113	almost	0.110	never	0.145	must	0.115
almost	0.108	sometimes	0.110	quite	0.135	never	0.105
often	0.108	might	0.090	often	0.125	probably	0.100
						might	0.100

上表から、読み取れる JPN の使用表現特徴を、以下 3 点に整理する。1 点目は、JPN は ENS 以上に読み手に対して主観的、強意的、説得的な表現の頻度が高いということである。具体的には、should、must、of course といった表現があげられる。これらは 2 種のトピックともに、JPN における頻度が ENS を上回っている。なお、JPN が should を好む傾向は、同様に JPN を対象としている Macintyre (2013) によって示された知見とも関連するものといえる。

2 点目は、JPN における緩和的・婉曲的な法助動詞 would の頻度は、ENS を下回っていることである。当該傾向についても、2 種のトピックに共通する傾向である。加えて、would と must の頻度関係は、2 トピックともに、JPN では「must>would」である一方、ENS では「would>must」であり、頻度関係が逆になっている。この点においても、JPN は ENS 以上に緩和的・婉曲的な表現

の頻度が低い可能性が推測される。

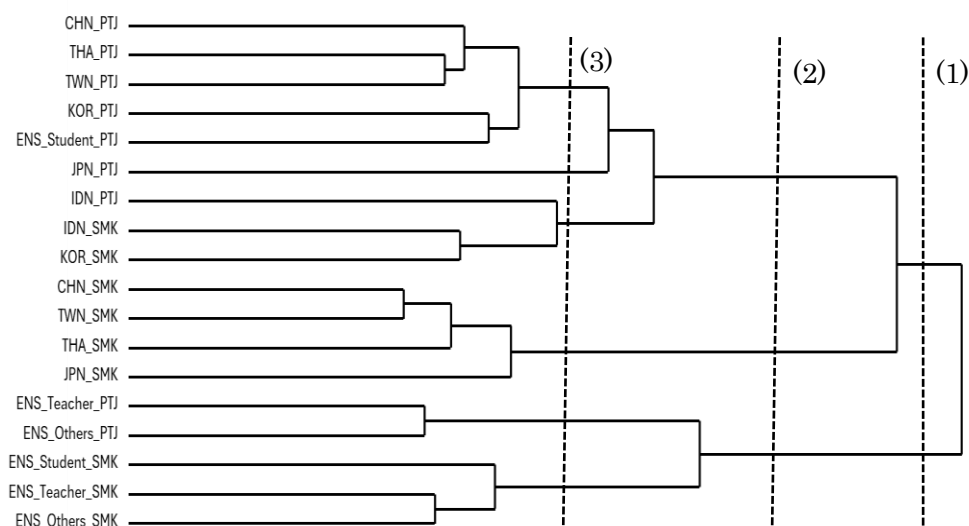
3 点目は、JPN 内部で、一定のトピック差が見られることである。may や would のような緩和的な助動詞の頻度は、PTJ よりも SMK のほうが高い一方で、must のような強意性の高い助動詞の頻度は、SMK よりも PTJ のほうが高い。また語彙動詞の頻度に関しても、JPN の場合、think や know といった表出行為に関する動詞の頻度が、PTJ の方が高い。この要因として、学習者にとっては、アルバイトに関連するトピックが、禁煙という社会的なマナーに関するトピック以上に親しみやすいことが考えられ、結果的に、前者において強い主張が表れたと推測される。なお、should については、PTJ 以上に SMK のほうが高頻度であるが、強制的な印象を与える must の使用を控えようとする意識が、一部の学習者に働いたことが可能性の 1 つとして考えられる。

4.2 RQ2 使用表現に基づく EFL 圏 6 地域の学習者と 3 種の職業属性母語話者の分類

RQ1 では、作文のトピック別に、JPN と ENS による使用表現の全体傾向を考察した。しかしながら、日本以外の他の EFL 圏地域の学習者や異なる職業属性を有する ENS との使用表現傾向と比較した場合、JPN はどの地域の学習者やどの職業属性の ENS と似通っている、あるいは異なる傾向があるのだろうか。そこで、すでに手法において述べた方法で、EFL 圏 6 地域の学習者 (2 トピック別計 12 群) と 3 種の職業属性別 ENS (2 トピック別計 6 群) における個々の対象表現の平均頻度表を作成し、階層的クラスタ分析を実施したところ以下のデンドログラムを得た。なお下図では、考察のために、カッティングポイント (計 3 か所) を設定している。

図 1

EFL 圏 6 地域の学習者と 3 種の職業属性別 ENS の分類 (トピック別)



上図から読み取れる内容を以下 3 点に整理する。1 点目は、カッティングポイント(1)において、

大学生 ENS の PTJ トピックの作文 (ENS_Student_PTJ) を除き、ENS と EFL 圏 6 地域の学習者は、個々の使用表現の頻度に基づき、概ね 2 区分されるということである。このことは、トピックに関係なく、JPN を含むアジア圏 6 地域の学習者は ENS とは異なる表現使用の傾向を有することを示す。なお、ENS_Student_PTJ のみが、他の ENS よりも学習者 (特に KOR) と近い位置づけとなった理由として、ENS の大学生が、他の職業属性の母語話者以上に、著しくアルバイトというトピックに対して親密感を得ていることが考えられる。WE において、ENS を除く、各地域の参加者は主に大学生であることから、母語話者・非母語話者 (学習者) という背景以上に、大学生という共通した背景が結果に影響したといえるだろう。

2 点目は、同一地域内であっても、作文のトピック差が存在していることである。カッティングポイント(2)において、CHN、TWN、THA、JPN の 4 地域については、PTJ のトピックと SMK のトピックが異なるクラスターを形成しており、同一地域の学習者であっても、トピックによって使用される主張の強弱表現に一定の差が生じていることが示された。

3 点目は、同一トピックの作文であっても、一定の地域差が存在していることである。カッティングポイント(3)に着目すると、JPN_PTJ と IDN_PTJ に関しては、他の 4 地域の学習者における PTJ トピックの作文とは異なる分類となっていることがわかる。この点は、同一トピックの作文であっても、アジアの EFL 圏内部において一定の地域差が存在していることを示唆する。

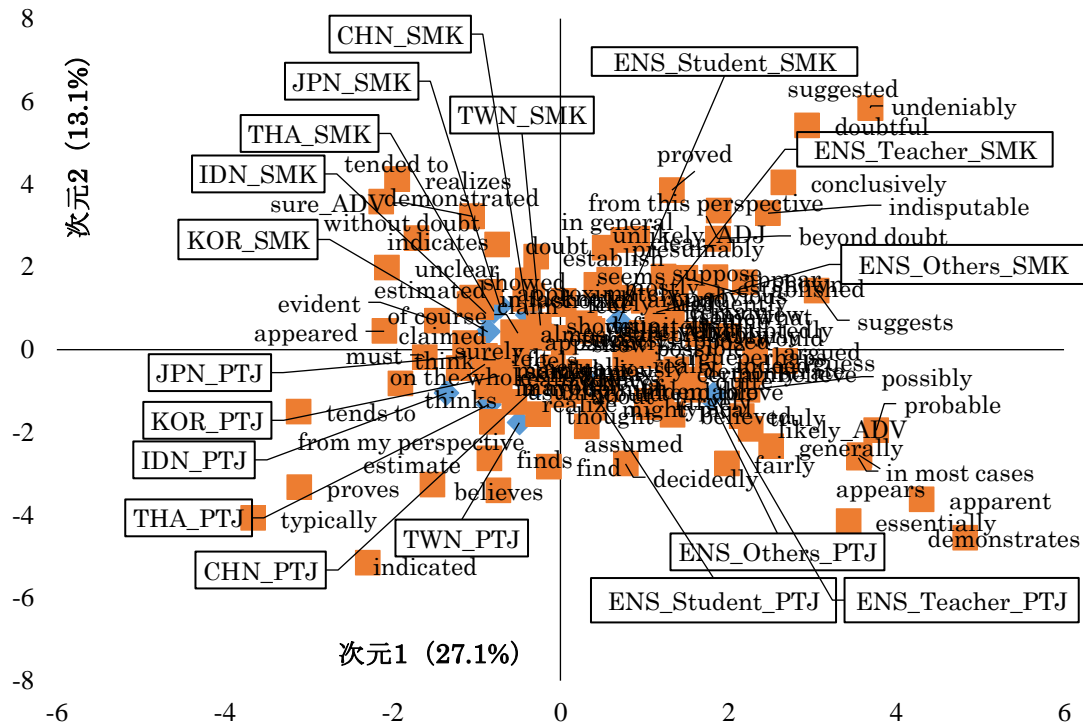
以上の 3 点が階層的クラスター分析を通じて明らかとなった。また、上記における考察を統合すると、EFL 圏 6 地域の学習者と 3 種の職業属性別 ENS が使用するヘッジ・ブースター使用には、まず母語話者・非母語話者 (学習者) という違いが大きく影響し、続いて英作文におけるトピック差が影響し、さらに地域差が部分的に影響すると考えられる。

4.3 RQ3 EFL 圏 6 地域の学習者と 3 種の職業属性別母語話者、個別表現の相互関係性

RQ2 では、作文のトピック別に、JPN を含む EFL 圏 6 地域の学習者と 3 職業属性別 ENS を、個々の対象表現の平均頻度に基づき、階層的クラスター分析を用いて分類を行った。次に、RQ2 によって推測された分類が、具体的にどのような表現によって生じているのかを考察する。RQ2 において使用した同一の平均頻度表に対して、対応分析を実施したところ、以下のような散布図を得た。

図 2

EFL 圏 6 地域の学習者・3種の職業属性別 ENS・個別表現の相互関係性（トピック別）



次元 1（横軸）と次元 2（縦軸）における寄与率の合計は 40.2%となっており、上図がデータ全体の 40%以上を説明していることが分かる。個々の表現の分布傾向に基づいて各次元を評価すると、次元 1 の右方には **apparent**、**generally**、**possibly**、**probable**、**seems**、**suggests** といった、包括的に幅広い物事の可能性に配慮した表現が分布している。一方で、左方においては、**evident**、**must**、**surely**、**of course**、**typically** といった、限定的な視点から受け手に対して明示的な主張を行う表現が多く分布している印象を得る。それらを踏まえると次元 1 は、「包括的・限定的視点の程度」を示す軸であると考えられる。

続いて、次元 2 の上方には **evident**、**in general**、**showed**、**suggested**、**without doubt** など、事実性を示唆する形容詞・副詞（句）、および過去形（あるいは過去分詞）の語彙動詞が多く分布しており、これらは過去の事象も含めた事実志向の表現であると推測される。一方下方には、**apparent**、**believes**、**from my perspective**、**likely_ADV**、**must**、**think** のように、書き手の主観の表出に関する表現が多く分布している。これらの表現は必ずしも物事の事実性を必ずしも示唆するものとは言えない。これらを踏まえると、次元 2 は「客観的事実への志向性の程度」を示す軸であると考えられる。

以上を踏まえ、以下の 2 点が読み取れる。1 点目は、寄与率の高い次元 1 において、「母語話者・非母語話者（学習者）」の区分が反映されており、学習者が母語話者以上に、限定的な視点から主張を行っていることである。なお、図 2 における次元 1 の右方には全体的

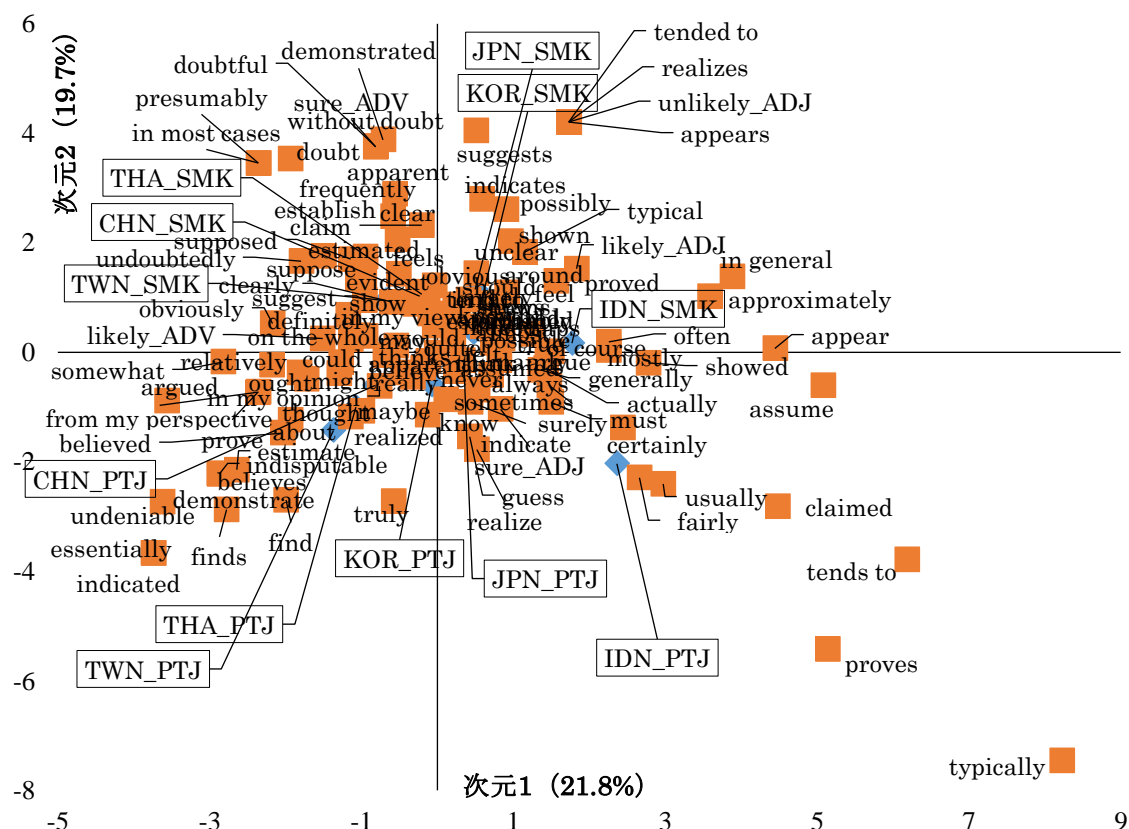
に強意性の弱い表現が、左方には強意性の高い表現が多く分布している傾向があるが、Ningrum, Puspita, & Mulyadi (2024) 等の先行研究で示唆されている、学習者が強意表現を多用する傾向が、「包括的・限定的視点の程度」によって生じている可能性が考えられる。

2点目は、次元2において「SMKとPTJ」というトピック差が反映されており、当該区分が、主張における客観的事実への志向性の程度によって生じていることである。SMKはPTJのトピック以上に事実志向性の高いトピックであり、この点については、母語話者と学習者の両方に共通する傾向であることが示された。

以上のことが上図において示され、これらはRQ2における階層的クラスター分析から得られた知見とも関連するといえるだろう。しかしながら、母語話者と非母語話者の差が強く結果に影響し、学習者の地域差を十分に取り出すことができていない。そこで、作成した平均頻度表から母語話者のデータをあえて除外し、学習者のデータのみを再度対応分析を実施したところ、以下のような散布図を得た。

図 3

EFL 圏 6 地域の学習者・個別表現の相互関係性 (トピック別)



次元1 (横軸) と次元2 (縦軸) の寄与率の合計は40%を上回っており、データ全体の40%

以上が説明されていることがわかる。同様に、個々の表現の分布傾向に基づいて各次元を考察すると、次元1（横軸）の右方には **generally**、**in general**、**typical**、**typically** といった一般論化を促す表現や、**must**、**surely**、**certainly** のような受け手に強く主張する表現、**often**、**sometimes**、**always** といった、物事や出来事における一定の頻度を読み手に保証すると推測される表現が分布している。これらは全体として読み手志向の表現である可能性がある。一方左方には、**find**、**show**、**suggest** といった表出に関連する動詞、**in my opinion**、**from my perspective** といった自身の観点の提示に関する表現が分布しており、これらは書き手の評価を優先した表現であると推測される。これらから次元1は、「読み手志向性・書き手志向性の程度」を示す軸と解釈できるのではないだろうか。

続いて、次元2（縦軸）の上方には、**clear**、**evident**、**obviously**、**possibly**、**without doubt** 等の事実の可能性に関する表現や、**in general**、**in most cases** といった一般論の提示表現、**suggest** や **show** といった内容提示に関する語彙動詞が分布している。これらは事実性に配慮した表現であると解釈することができる。一方で下方には、**might**、**maybe** 等の控えめに主観を提示する表現や、**from my perspective**、**in my opinion** といった書き手自身の意見表出を示唆する表現、**find**、**guess**、**know** といった主観の表出に関する語彙動詞が分布している。これらは、主張される内容において、より多くの主観が反映されていることを示すのではないだろうか。以上より、次元2は、「客観的事実への志向性の程度」と解釈することができるだろう。なお、次元2の下方（事実志向性が低い）には **usually** や **always** といった一般化を促すような副詞も複数みられるが、当該次元の下方には PTJ のトピックが多く分布していることから、書き手自身が、主観的に個人的な経験を描写している可能性が考えられる。

以上を踏まえ、アジアの EFL 圏 6 地域の学習者が使用するヘッジ・ブースター傾向には下表に示すような地域差が存在している可能性がある。

表 5

アジアの EFL 圏 6 地域の学習者におけるヘッジ・ブースターの使用傾向

象限番号	学習者の分布	使用表現特徴
1 (次元 1>0, 次元 2>0)	JPN__SMK KOR__SMK IDN__SMK	読み手を意識し、事実や一般論を踏まえた主張が提示される。
2 (次元 1<0, 次元 2>0)	THA__SMK CHN__SMK TWN__SMK	書き手による幅広い強弱を伴う主張が、事実や出来事の可能性に配慮され提示される。
3 (次元 1<0, 次元 2<0)	THA__PTJ CHN__PTJ TWN__PTJ KOR__PTJ	書き手の主観性が強く反映され、客観的視点による主張は必ずしも含まれるとは限らない。
4 (次元 1>0, 次元 2<0)	JPN__PTJ IDN__PTJ	読み手に対して、説得的かつ明示的に、強意的な主張が提示される。

上表を踏まえ、本研究の主たる関心である JPN の使用表現特徴に関して、以下の 2 点がわかる。1 点目は、PTJ と SMK の両トピックにおいて読み手を強く意識した主張を行うことである。この点は、図 3 の散布図における次元 1 の特徴を反映したものであるが、2 トピック両方において当該傾向を持つ地域は、JPN と IDN の 2 地域であり、これらは他の 4 地域とは異なる傾向があるといえる。この点は、RQ2 において実施した、階層的クラスタ分析を通じて得られたデンドログラムが示す傾向とも関連するといえる。

2 点目は、JPN は、SMK のトピックにおいて客観的な事実性に配慮した表現使用を行う傾向がある一方で、PTJ のトピックにおいてしばしば主観性の高い主張を受け手に提示する可能性があることである。なお、当該傾向は JPN に関係なく、対象 6 地域の学習者に共通する傾向であるといえる。さらに図 2 と図 3 の次元 2 は共通の解釈が可能であることから、当該傾向は ENS においても当てはまる傾向であると考えられる。

4.4 総合考察:WE における用例の観察

頻度調査に基づき以上の知見が得られたが、本節では WE における実際の作文例の一部を引用し、それらを観察する。トピックを PTJ に限定し、日本人学習者 (JPN)、英語母語話者 (ENS)、台湾人学習者 (TWN) の順に、作文の一部を以下に引用した。

- (1) Of course you **must** study as a college student. And even if you are still a college student, you **must** work seriously as long as you decide to do the job. But mistakes will strengthen you by getting through it many times.

(ICNALE_WE_JPN_PTJ0_113_B1_1)

- (2) Their workloads **would** increase and they **would** have to learn to balance their time in such a way that they can keep a happy medium between their job and also not miss out on their study time.

(ICNALE_WE_ENS_PTJ0_184_XX_2)

- (3) As became a freshman, students **might** have to leave their hometown far for good university and parents **might** tell them that you **should** deal with everything by yourself include your costs for live.

(ICNALE_WE_TWN_PTJ0_002_B1_1)

上記の3種の用例を概観すると、JPNは **must** という強意的な表現を複数回使用し、全体的に主張の強度が過度に高まっている印象を得る。さらに、2つの **must** は共通して **you must** という表現中で使用され、読み手に強く説得的な主張を提示している。その一方 ENS の作文では、控えめな主張を、**would** を用いることで行っている。また、他地域の学習者の作文の1例として引用した TWN の作文では、一定の主観性が反映されているものの、JPN の作文ほど、読み手に対して過度に強意的な主張を提示するものではないと考えられる。

上記における用例の観察も踏まえると、日本人学習者は、特に PTJ のような書き手の主観を強く反映可能なトピックの作文において、受け手に強意的な主張を行う傾向があると推測される。主張の強弱調整のあり方は、個人によって異なる部分も多いが、本研究の頻度調査に基づく知見に基づけば、日本人学習者に対して、緩和的な表現の使用を含む幅広い強弱調整の方法を明示的に指導することも必要なのではないだろうか。

5. まとめ

本研究では、主張の強弱調整の機能を担う、ヘッジやブースターに焦点を当て、日本人学習者の当該表現の使用実態を、アジアの EFL 圏 6 地域の学習者、および 3 種の職業属性別の母語話者間の比較を通じて考察を行った。また、作文のトピック差についてもあわせて考察を行った。

RQ1 では、日本人学習者全体と英語母語話者全体を比較し、トピック別 1 作文当たりにおける個々の対象表現の頻度を調査した。その結果、日本人学習者は、英語母語話者以上に (1) **should**、**must**、**of course** など、主観的、強意的、説得的な表現が高頻度であること、(2) 反対に **would** といった緩和的・婉曲的な法助動詞の頻度が低いこと等が示された。また、日本人学習者内部においても一定のトピック差が存在しており、(3) **may** や **would** のような緩和的な助動詞は SMK において頻度が高く、**must** のような強意性の高い助動詞や **think** や **know** といった主観を表出する語彙動詞は PTJ において頻度が高いこと等が示された。

次に RQ2 では、トピック別 1 作文当たりの対象表現の平均頻度に基づき、EFL 圏 6 地域の学習者と 3 種の職業属性別母語話者を、階層的クラスター分析によって分類した。分析によって得られたデンドログラムから、対象学習者や母語話者のヘッジ・ブースター使用には、(1) 母語話者と

非母語話者の差、(2) 英作文のトピックの差、(3) 学習者の地域差が一定の範囲内で影響している可能性が確認された。なお、日本人学習者については、特に PTJ トピックの使用表現において、他地域の学習者との間に一定の地域差が存在している可能性が示された。

最後に RQ3 では、RQ2 で使用したものと同一の頻度データに対して対応分析を実施した。その結果、(1) 主張が限定的で強意的な学習者と、広く包括的な視野を踏まえ、緩和的で弱い主張を含む幅広い強弱の主張を行う母語話者の 2 区分に分類される可能性があること、(2) さらにそれぞれが、客観的事実への志向性が高い SMK トピックと、志向性が低い PTJ トピックの 2 区分に分類される可能性があることが示唆された。さらに、対象とした 6 地域における地域差を考察するため、母語話者のデータを除いて再度対応分析を実施した結果、特に日本人学習者やインドネシア人学習者は、より読み手を意識した意見英作文を行う可能性があることが示唆された。

以上が、本研究を通じて得られた知見であるが、本研究には一定の課題も存在する。具体的には、学習者の地域差・学習者の習熟度差・母語話者の職業属性差・作文のトピック差の 4 観点すべてを踏まえた総合的な考察については、さらなる調査の余地があるという点である。当該項目については今後の研究課題としたい。

研究インテグリティ宣誓

本稿著者は、本論文が著者自身によるオリジナルの研究成果であって、他者の著作物の剽窃や盗用、データの捏造や改竄、二重投稿、貢献度を反映しない著者名表記といった一切の不適切行為を行っていないことを宣誓する。なお、生成 AI に関しては、下記の目的でのみ限定的に使用した。

(1) 本稿の英語タイトルの表現チェックおよび校正

ただし、生成 AI の出力をそのまま論文に引用することを含め、研究インテグリティに抵触する可能性がある行為は一切行っていない。

引用文献

Granger, S. (2015). Contrastive interlanguage analysis: A reappraisal. *International Journal of Learner Corpus Research*, 1(1), 7-24.

Hyland, K. (2019). *Metadiscourse: Exploring interaction in writing*. Bloomsbury.

飯島真之 (in press). 「現代英語における重要ブラスター・ヘッジに関する一考察: CORE コーパスを用いた 33 レジスター別頻度調査を踏まえて」. 『中部地区英語教育学会紀要』, 55.

Ishikawa, S. (2023). *The ICNALE guide: An introduction to learner corpus study on Asian learners' L2 English*. Routledge.

石川慎一郎 (2024). 「森を見ながら木をみる」コーパス研究の意義: 複数テキストから統合語彙頻度表を作成する EJWFTG の開発」. 『統計数理研究所共同研究レポート』,

469, 95-122.

- Macintyre, R. (2013). Lost in a forest all alone: The use of hedges and boosters in the argumentative essays of Japanese university students. *Sophia International Review*, 35(35), 1-24.
- Ningrum, S., Puspita, H., & Mulyadi, A. I. (2024). Hedges and boosters in academic writing of ASEAN EFL learners. *Journal of English Education and Teaching*, 8(1), 202-218.
- Wang, J., & Jiang, F. K. (2018). Epistemic stance and authorial presence in scientific research writing: Hedges, boosters, and self-mentions across disciplines and writer groups. In P. Mur-Dueñas & J. Šinkūnienė (Eds.), *Intercultural perspectives on research writing* (pp. 195-216). John Benjamins.

コーパス

ICNALE: The International Corpus Network of Asian Learners of English.
<https://language.sakura.ne.jp/icnale/>

分析ツール

AntConc. <https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/>

EJWFTG: English/Japanese Word Frequency Table Generator.

<https://colab.research.google.com/drive/1z3AGxKdihUqtJ81GX0r-PMdggRzBl6dj>

HAD. <https://norimmune.net/had>